

## マレー世界——ナマコを求めたスペイン

赤嶺 淳

マジエランが1521年にフィリピン諸島にたどりついたとき、船団のなかに島のことばを解する者がいた。その名は、エンリケ・ド・マラッカ。太平洋横断に先立つ1511年、ポルトガル軍によるマラッカ攻略の戦利品としてマジエランが獲得した「奴隸」である。

エンリケはスマトラ島出身だった。とすると、かれがビサヤ諸島の首長たちと交わした言語はマレー語以外にありえない。そう、フィリピン諸島は「マレー世界」の北東端に位置しているのである。

かつてはマレー世界を「マレー語を介した交易でつながっていた地域」と理解しておこう。東南アジア多島海を中核とし、周辺のインド亜大陸東部から東南アジア大陸部にかけての沿岸社会を包摂する海域である。マレー世界の中心ともいえる今日のマレーシアやインドネシア、ブルネイからすれば、イスラームであることがマレー世界の一員たる必要条件に感じられるかもしれない。たしかに、イスラーム化は重要な要素ではある。しかし、それは十分条件ではない。マレー世界のイスラーム化は、歴史の偶発性に由来するからだ。

スペインによるフィリピン諸島の植民化政策においては、南部のイスラーム化したムスリム勢力との抗争が展開された。そのため、クリスチャン・フィリピーノが「モロ」と一括するイスラーム諸民族に対する不信感には、今日でも根強いものがある。しかし、米国人歴史家のジェームス・ウォレンは、スペインにとって宿敵だったはずのイスラーム化したスル王国がマレー世界全域にはりめぐらした島嶼間交易ネットワークに、いかにスペインが依存し、その恩恵を受けていたかをあきらかにした [Warren 1981]。

考えてみれば、それは当然でもある。マジエランが命を賭してまで太平洋航路を開拓したのは、キリスト教の布教という宗教的動機だけではなく、ナツメグやクローブなどの香料をはじめとする稀少資源の確保という商業目的が存在したからである。しかし、スペインはフィリピン諸島から香料はおろか、なんらめぼしい稀少資源を見出すことができなかった。そのような環境のなか、周辺海域に産する自然資源が集散していたスル王国との貿易にスペインが傾倒するのは必然であった。したがって、キリスト教とイスラームとの抗争史ばかりを強調しすぎると、スペインが参入を企てたマレー世界内の交易実態を見落とすことになり、ひいてはフィリピン史像を歪めかねない。

スル王国とマニラとの交易品は、もちろん、多岐にわたっている。しかし、だいたいにおいてマニラから運び込まれた商品の代表は米であり、スル王国から輸出されたものの多くはナマコと真珠、蜜蝋であった。ナマコと真珠は、スル諸島に無数に散在するサンゴ礁に産出する海産物で、対中国貿易の商品であった。他方、蠟燭の原料となる蜜蝋はボルネオ島やミンダナオ島の熱帯雨林に産出する林産物で、おもにヨーロッパ市場にまわされた。

スペインによるアジア貿易は、マニラに集められた中国産の陶器や絹製品をメキシコ経由で本国に持ち帰るガレオン貿易が有名である。その決済は、当時、スペインの植民地であった南米大陸で産出される銀を基本とした。銀による決済を基本としたのは、中国産の茶をもとめたイギリスも同様である。しかし、あまりにも輸入超過となったイギリスが銀に代わってアヘンを中国に売り込んだように、スペインも、中国市場がもとめる商品を物色する必要に迫られた。それが、真珠であり、ナマコであった。今日の真珠は養殖真珠である。しかし、自然の状態で貝が珠を抱く天然真珠はきわめて希である。したがって、白羽の矢はナマコに向けられたのである。

中国で乾燥ナマコの利用が普及したのは、およそ400年前の明清交代期である。日本からも、江戸時代には長崎を通じて中国に乾燥ナマコは輸出されていた。倭物貿易として知られる、徳川幕府による貿易が開始されたのが17世紀末である。まさに中国でナマコ需要が拡大する時期のことである。同時期、現在のフィリピンやインドネシアでも乾燥ナマコの生産がはじまった。事実、スル王国の勃興は18世紀半ば以降のことであり、その富の源泉はナマコ交易にあった。

ナマコは浅瀬のサンゴ礁を涉猟するだけで、簡単に採取できる。特別の技術は必要としないものの、多くのナマコを獲るには、人海戦術しかない。そのため、東南アジア多島海では労働力を確保するための奴隷狩りが頻発した。小人口世界の東南アジアにあって奴隷は貴重な労働力である。だからこそ、首長なり貴族なりの権力の象徴であった。かれらは、みずからの権力を安定させるため、頻繁に海賊を組織した。そうした海賊行為を有利に導いたのは、ナマコと交換にヨーロッパ商人から入手した銃火器であった。ウォレンは、スル王国の最盛期にナマコ採取に従事した奴隷人口を2万人と推定している [Warren 1981: 70]。

イギリスがインドやスリランカで茶の栽培に成功するのは、19世紀なかば以降のことである。アヘン戦争（1840～42年）に勝利したイギリスが、中国国内を探検し、茶のなんたるかを知ったからである。その頃、スペインが独占していたガレオン貿易は終わり、マニラは自由貿易港となった。フィリピン諸島で生産され

たタバコや砂糖などが輸出されるようになったからである。西洋諸国による東南アジアの植民地化は、当初、アジアに産する稀少資源の貿易支配にあった。しかし、かれらの関心が、タバコや砂糖などの一次産品の（強制）栽培に移るとともに、スル王国の域内交易の優位性も失われていった。おりしも、それは蒸気機関による軍艦が東南アジア多島海に進出してくる時期でもあった。

クリスチャン・フィリピーノの深層心理に深く刻まれているムスリム海賊襲来劇は、そのほとんどが奴隷調達を目的に組織されていた。逆接的にすぎるが、こうした海賊は、マニラがガレオン貿易を堅持しようとする以上、不可避であった。フィリピン史をキリスト教とイスラームとの宗教対立として捉えると、こうした一面を見落としてしまう。ウォレンは、そう警告するのである。

#### 参考文献

- Warren, James F. 1981. *The Sulu Zone: The Dynamics of External Trade, Slavery and Ethnicity in the Transformation of a Southeast Asian Maritime State*. Singapore: Singapore University Press. Reprinted by New Day Publishers, Quezon City, 1985.